

可認物便郵種三第省信遞日六十二月二十年一十三治明  
行發日五十日一回二月每 行發日五十月十年五十三治明



録原

# 報時教政

號九十八第

## 論說

傳道事業を論ず

『新社會』を讀む

## 社會

◎ 教界時事 ◎ 工場法案の精神 ◎ 尙之を行はんとするか ◎ 近時教界の思潮

獨乙加特力教徒大會

## 雜錄

無我の福音

病より得たる教訓

▲ 旅より ▼

## 視察

勞働院

▲ 閑文字 ▼

## 信界

佛弟子小傳

▲ 報道一束 ▼

(社説)  
楠龍造

(海外時事)

常盤大定

和田鼎

旭村生

池山榮吉

近角常觀



大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善美なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして、時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

政 教 時 報

傳道事業と論ず

近世歐洲に於ける傳道事業の發達は頗る顯著にして吾人の竊に驚嘆する所である。而して其事業を視察するに二種に分れ、一は内的傳道にして一は外國傳道これである。内的傳道とは内國に於ける慈善事業、社會事業を始めとし、幾多の宗教的感化に關する施設を指すもので、之を内的傳道と名くるは、吾人の内心に潛みつゝある罪惡を救済する意味を含んで居る。此汚れたる心靈上の大改革を促すものは正に宗教の生命たる燃ゆるか如き信仰の力より外にないのである。

現時の日本か最も要求し且つ焦眉の急に迫りつゝあるものは、此意味に於ける内的傳道である。政治界であれ、實業界であれ、將た教育界であれ、何れの社會に於ても殆んど生命か枯死して些の活氣あるなく、些の活動もない、そして一方には益々腐敗し益々墜落を極むる所以のもの、畢竟清新なる信仰の存在せぬからである。先づ第一に、社會の最も緊要なる位置を占むる人士が、宗教の生命たる信仰を確持して働かねばならぬ。若し是等の人士にして信仰の生命を有するに至ら

ば、一人は忽ち數人を感化し、數人は忽ち數十人を感化し、以て一郷より一郡に、一郡より一縣に及ぼし、遂に社會の改良を大成すること、掌を返すよりも易々たることである。此精神ありて幾多の救濟事業は事實上に現はれ來りて、佛陀救濟の條を此世界に見ること決して至難の事ではない。今試に其著しき實例として西洋に於ける青年會の統計を示さうと思ふ。最も左の表は一昨年の取調にかゝるものであるが、英國を始め現時世界に散在してゐる青年會のいかに盛大であるかは、これに依りて一目瞭然である。

	大ブリテン	英國殖民地	外國	總計
中央部	一、四七二	二、九七	五、四七	七、二七
會員數	一〇三、四三〇	三七、三七四	四〇六、一三三	五三六、九六
建築物	一三五	五三	四八〇	六六七
價格	六、二六四、九五〇	三、一八九、七〇〇	四三、三三五、四五〇	五三、六七〇、一〇〇

如斯發達し成功したる青年會の起原に就いて略述して見るも強ち無用の業にあらずと思はる。

抑々この青年會の起原を察するに元シヨール、ウイリヤムなる人の信念の發洩より如此偉大なる結果を現出したるのである。彼は千八百三十七年、十六歳の時英國ブリッ、ソウライターの太物商館に奉公したる丁稚小僧であつた、然るに



彼は此時早くも信仰の猛火を以て一身を包まれ、そして熱心なる祈禱を捧げてのと同輩を感化することに勉めた。超へて千八百四十一年彼は倫敦に來りて、ヒチコック會社の太物商館の手代となつた。此時彼は八十人の同輩を集め、會てブリッショウフーターに於けると同様に非常なる熱心を以て之を感化せんとした、彼は毎日其業務の終りし後、同輩を寢室に集め大に信仰の修養に勉められた。此信仰の修養が即青年會の起る根源となつたのである。彼が一點信仰の火は遂に今日の如く世界全般に普及するに至つたのは、信仰の力偉大なりといはねばならぬ。

千八百九十四年六月一日より七日に至る一週間に於て青年會創立五十年祭を舉行したることがあつた。此時世界各國より派遣せる代表者は、或はセントポール寺院に於て或は、ウイストミンスター伽藍に於て、或はウインソル宮城に於て集會を催し遠足を試みる杯非常の盛大であつた。一日ローヤル、アルバートホールに於て大儀式を施行し、其創立者たるデヨード伯爵は一場の演説をなしたる後、ジョージ、ウイリヤムは恭謙なる答辭を述べて曰く、余は凡て此等に價する物をなした事はない、余は此會を起した時決して斯様になるべしとは夢にも想はざる所て、吾々の數人は小室に相會して互に一週間ニシリング、六バンス(一圓廿五錢)を齎したる迄

るののである。若し現代の如く社會が極端に墮落し宗教界と自身が全く廢敗し去りたる時、此真正の意味に於ける傳道の最も必要なる時である。然るに現今の佛教者か爲す所を見るに、單に佛教を以て一種の哲學となし或は一種の歴史學として研究するものは多い、去れど、之を宗教として敬虔なる信仰を抱くものは洵に少くない、亦之を宗教として傳道事業に熱血を濺かんとするもの、少なきは寧ろ當然の事である。

古來、信仰の烈火熾なる時は其精神必ず傳道事業に發揮せられたことは、史に徴して明瞭なる事である。其一二の例を挙げれば、印度に於て阿輸迦王の時、傳道事業が頗る旺盛であつて、印度全体は勿論、南、錫蘭に及び、西、歐洲の境域に至る迄傳道師を派遣し其熱心なることに實に驚くべき有様であつた。又我國にても佛教渡來のとき聖德太子は傳道事業に向て非常に力を盡くし、施設經營を完備し社會の欠陥を救濟せられた。殊に鑒眞の如き老耄を抱き冒險を企て、大法を我邦に傳へたる如き實に佛陀の生命か躍如として生きてゐる心地かする。苟も傳道事業に従ふものは此精神か最も肝要である、此精神か供はらぬ以上は砂上樓閣を築くと同様に、其根底を固めることは出来ない、從て傳道事業は常に動搖を來たし永久の發達を見ることは費束ない。精神とは何であるか、燃ゆるか如き信仰これである。信仰は宗教の生命である、此生命

に過ぎなかつた。今や如斯發達し以て今日あることは到底豫想し得られなかつた、これ徹頭徹尾吾々の力ではない、余は毫も之を了解し能はぬ、余にとりては全く秘密であると述べられたさうである。以て信念が如何に偉大なる結果を來すかを知ることか出来る。

吾人會て氏をエキセター、ホールに訪ひたる時、氏は童顏鶴髮吾人の手を握り温き同情を以て遠來の勞を慰められたことは、今尙想起して忘るゝことは出来ぬ。吾人は信仰の如何に人格を造り、また大なる事業を成すかを實驗した次第である。

要するに傳道とは徒に聲を大にして教域を擴張し、名義上の信者の數を増加することではない。真正なる意味に於ける傳道なるものは、吾人人生上に於て或は精神的に或は社會的に非常なる憂悶と暗黒とに陥りたる時、心中佛陀の靈光を感じ大慈悲の救済に攝取せられて滿身歡喜の情を以て翻へりて世人が同じく苦悶暗黒の裡に彷徨するを見て同情の熱誠押さへんとし抑うるに由なく哀々の念溢れて德音の宣布となり、切々の情凝りて社會救済の事業となるのである。故に傳道の精神が熾になると否とは畢竟其信仰の強さと自身力の固きに正比例するもので、其強き信仰と固き自信力は苦悶暗黒を解脱したる結果にして、亦他の苦悶暗黒を救済する根源となる。

たる信仰が傳道事業に現れ來り、牢固の根柢をつくり、譬へ世上滔々たる濁浪險波をあげ來るとも決して動搖するの恐はない。毅然として益々社會の墮落を救済することが出来る。然るに今や我教界の萎靡沈淪殆ど其極に達し、奮然蹶起生命ある大法を宣布せんとするもの一人もない。我國十萬の僧侶其數決して少なくない。而も一人のジョージ、ウイリヤムなきに至りては、洵に浩嘆の至りである。

### 『新社會』と讀む

楠 龍 造

世界の文明は未開時代に比較して、どれほど社會の苦惱を減少せしめたであらうか、どれほど社會の罪惡を減少せしめたであらうか、法治國と呼ばれて雨後の葺の如く法律制度の出来るは、これやがて犯罪の多大なるを證明するものにはあらざるか、倫理の叫高くして倫理運動の盛なるは、これやがて人情輕薄非徳亂倫の瀰滿せるを證明するものにはあらざるか、自殺者の多きは社會苦惱の減少を意味すと云ふを得べきか、發狂者の多きは社會苦惱の減少を意味すと云ふを得べきか、吾人は文明なるものは果してどれだけの幸福利益を與ふるものなるかを疑はざるを得ない、どれほどの價値能力あるものなるかを疑はざるを得ない、若し吾人をして思ふ所を



斷言せしめば、現時の社會に一大缺陷があるからである、一大疾病があるからである、社會成立の根本的精神に一大誤謬があるからである、かゝる缺陷、疾病、誤謬の間は、社會は永久苦惱と罪惡よりまぬがれ能はざることである、まさに矢野龍溪氏、深遠の思想を流暢温雅の筆によせ、「新社會」なる一書を世に公にした、現時社會組織の弊毒を痛論して、理想的新社會の農工商政治法律教育等の組織を論述すること、頗る詳細切實をきはめてある、二三ヶ月間に既に十版を重ねた程の聲名噴々たる好著述である、吾人は之を一讀して大に愉快を覺ゆると同時に遺憾に堪へざるものがある、それは組織は立派に出来あがつてあり形式は立派に出来あがつてある、けれども、新社會の大精神が缺乏して居ることである、恰も美麗に装ふた人形の様である、美なることは美なれども生きたる生命はないではないか、靈活なる精神はないではないか、躍々たる活動を見ることは出来ぬではないか、矢野氏の『新社會』は、精神なき美装せる人形の社會である、現時社會組織の根本的の一大謬見とは何であるか、農業なり工商業なりをするについても、政治なり教育なり學問なりを知るに就ても、其精神とする所は「自由競争」である、語を換て之を言へば、「弱肉強食主義」である、勝ては官軍負れば「賊」と云ふ主義である、制限ある「強呑弱主義」である、今日の「自由競争」主義では、自己の希望目的を到達せんと欲

すれば、弱者を蹴倒して進み、同列者は表ては笑をあらはし、裏面に隠險の狩手段を考ひ、一旦機會に乗して之を張倒し、自己ひとり進て行かねばならぬと云ふ組織になつて居る、何と淺間しき限りではないか、然るに世人は皆此の「弱肉強食主義」に謳歌して曰く、これ進歩發達の道なり、是れ醜惡を變じて善美となす道なりと、嗚呼迷へるも甚しきではないか、若し此主義が價値あるものならば、虎狼は最も價値あるものと云はねばならぬことである、見よ虎狼は情も容赦もなく自己の欲望を達するために、「弱肉強食主義」を實行するではないか、此主義の下に此思想の下には、如何に法律制度が完備すればとて、如何に倫理運動が盛大なればとて、何んて罪惡がなくなりませうか、詐偽がなくなりませうか、偷盜がなくなりませうか、放火殺人がなくなりませうか、苦惱悲惨がなくなりませうか、此點に就ては矢野氏の意見は吾人と或程度まで一致して居る、

夫れ智識は各人の成立に必要な要素なり、然るに舊社會にては教育を受け得べき有様に生れ來りし仕合せ者もあり、又生れ落て生活さへ覺束なく、教育を得能はざる不仕合せの者もあり、此無教育者と教育者とは、恰も幼兒と丁男との如し、然るに之を放て相闘はしめ、之を目して隨意競争と云ふべきか、又資本は事業界に於ける競争の利器なり、然るに舊社會にては、生れながらにして資本を擁するの幸

を得たる者もあり、資本はねろか、生活さへ爲し得ざる不幸の有様に生れたる者もあり、一方は資本の武器を擁し、一方は赤手にて躍出づ、之を放て闘はしめ之を目して隨意競争と云ふべきか、又幸にして資本に近づき得べき有様にあり、到底資本を得られざる有様に在るものあり、然るに兩者を放て闘はしめ、之を隨意競争と目すべきか、舊社會に謂はゆる隨意競争なる者の本體真相を無遠慮に露呈すれば、兩君實に此の如し、尙ほ是をしも眞の隨意競争と謂ふ可きか、若し眞に隨意競争を爲さしめんと欲せば、双方の教育を一樣ならしめ、双方の資本を一樣ならしめ、双方が資本を得べき有様を一樣ならしめて、而て後ち始めて之を眞の隨意競争と云はんのみ云々(新社會)

此現社會には隨意競争と云ふことを、滅絶せしむることが出来ぬのみならず、公平なる競争さへ行ひかね、默的競争のみであると云ふは、豈に長大息の至りではないか、矢野氏は公平なる競争はよいと云はるれど、若し最上の理想より云へば競争と云ふは他を倒すを意味するを以て、どしして默的性質を脱したるものではない、よいと云ふことは出来ぬ、各人の農工商の仕事をするなり、政治法律をするなり、學術文藝に従事するなり、其動機は他と競争して之を倒して快哉を絶叫するにあるのだと思ふは何たる迷妄ぞ、我は我が本務のために能ふだけの力を以て農工商に従事するのである、我

は我が本務のために能ふだけの力を以て政治法律に従事するのである、我は我本務のために能ふだけの力を以て學術文藝に従事するのである、本務のために本務を行ふのである、吾人よりして之を言へば佛陀より命せられたる仕事をなすのである、此无競争の中に、喜で職務に従事する様にならなければ、眞正の慈悲、安寧、幸福、健全の社會を見ることは出来ないものである、

社會をして自由、平等、博愛、健全ならしむる根本的精神は何處にあるか、矢野氏は國家に於て土地なり山林なりを所有し農工商百般の業務を國家の手にて行ひ(一二の個人的業務を許すにせよ)、從來の土地所有者等には六分の所を下附し、其余の所得金は公平に勞動者に分配すると云ふ仕組である、之によりて貧富の懸隔をなくし、之に依て不正の競争を滅絶し、之に依て社會平等に安寧幸福を得んと期待せらるるのである、其組織は如何にも立派である、其制度は如何にも完備して居る、されど形体は如何に立派でも活潑々地たる精神がなければ死物である、矢野氏の『新社會』は美装せる人形であるまいか、容貌いかめしき死人ではあるまいか、吾人はどしして『新社會』の根本的精神と云ふものを認めることは出来ぬ、一國の興廢存亡するも、社會の消長盛衰するも、其奥の奥を探てみれば、唯に法律制度の上でなく、風俗習慣の上でなく、形而上的思想宗教的思想がそが究竟の源泉とな



つて居るのである、明治維新の大業は、唯に法律制度の改正のみに依て得られたてはなく、日本人特有の二千餘年保有し來れる尊王愛國の形而上的思想が煥發したる結果でないか、米國獨立の偉業は、唯に英國の壓制にたへないと云ふのみにあるではない、神は人類に平等に自由を與へたと云ふ宗教的思想は、其深き源泉ではないか、矢野氏の『新社會』は形而上的思想のなき社會である、宗教の缺如せる社會である、風吹けば吹き飛ぶる社會である、雨ふれば流れ去る社會である、輕きこと綿の如き社會である、何んと空中の唇氣樓と類似して居るではないか、私は思ふ、『新社會』の大精神は、愛は人類の最大精神であり、人の靈たる所以は此愛にありと云ふことを自覺するにあるのである、社會は一体であり人類は同胞であり、職務は本務のためにするのであると云ふ事を自覺するにあるのである、之を要するに世界精神は愛の力なりと云ふ自覺が、社會人民に起らなければ、眞正の『新社會』は出現することは出来ない、眞正の『新社會』の『メシヤ』たるものはそれ誰であるか。

名不干而來者。實也。利不貪而至者。義也。名利非可厭。但干與貪之爲之病耳。  
佐藤 一 齋

教界時事

各宗會議——萬國聯合會

今や天地清肅の氣満つと雖、我教界依然として寂寞を極め殆と萎靡不振の状態に陥りつゝあり、唯名と利に耽りて營々鬪鬪俗人も尙之を耻つる行爲をなして而も之を耻ちとせず、徒に形骸に馳せて外觀を装ひ、宗教の根本義たる佛陀の大慈悲を以て溷濁せる現社會を救済せんとも思はず、徒に喧嘩これ事とする而已。教界の萎靡不振素より其所なり。近時各宗會議に於ける覺王殿建設の如き其一例なり。建設の事や大勢既に決すべくして區々たる利害の爲め遷延數日、議、容易に合はず、紛擾又紛擾於是乎宗派間の軋轉となり感情の衝突となり、遂に分裂を見るに至りぬ。假令覺王殿建設の議既に定まると雖、各宗派の統一するなくば、そが前途に向て少なからざる影響を及すや明白なる道理なり。吾人もとより各宗會議其者に重を措くものにあらず、從て各宗派互に聯合したるものと見ることも能はざる也。吾人は此會議を以て獨り覺王殿建築といはず、其他凡ての問題を論せず、社會の耳目を發動するの勢力あるものと認むること能はず。此勢力なき斷片今又小利害を異にするの點より、將に分裂を來さんとせ

り、吾人各宗派の現狀に顧みて聊か氣の毒に堪へざる也。次に萬國青年聯合會は高輪派の佛教有志によりて企てられたり。而して其目的たるや、世界各國の佛教信徒及佛教の研究に従事しあるもの、交通機關となり、互に氣脈を通して佛教の眞精神を宣揚するにありといふ。其事業として左の各項を實行する由。

- 一、各國の佛教者と聯絡し各地佛教の現狀及意見等の通信をなすこと
- 一、日本より海外に赴く佛教徒及海外より日本に來る同教徒に可及丈便宜を與ふること
- 一、英文にて各地の通信其他を報告すること
- 一、時々日本其他にて大會を開くこと

目的や大なり、事や快なり。徒に蝸牛角上の小園を事とするよりは、眼を時局の大勢に凝して日本の佛教をして世界的佛教たらしむるに於て、好し其事業や十分に達し得られずとするも、教界の寂寞を破る一曙光たるを失はじ。吾人心竊に此舉を贊せんとするもの也、希くは成功を急ぐ勿れ。

工場法案の精神

工場法案に關し當局者が説明したる該案の精神なりとて、二三の新紙上に顯れたる記事を見るに、現狀の如くにて推し進むときは社會主義を形成し、勞働者は雇主に對し過當の要求を爲すに至り、急劇の要求より雇主の迷惑を惹起するが如き虞なしとせず。故に今日に於て稍穩和の工場法を發布する

は、將來困難なる問題を豫防するに於て多少功なしとせざるなりと。

思ふに穩和なる工場法とはそれ如何なる意味を指すか、或は勞働者の爲めあまり利益を計らざる法案をつくらむとする意なるか。若し然らば資本家の利益を計るに至らずとするも少くも彼等の味方たらむとするか、説明としては甚だ不明瞭と云はざるべからず。我柔順なる勞働者は非道強慾なる質本家の爲め虐待酷使せられたること十數年の長き間なり、假令勞働者の味方たらざるも資本家の惡弊を一掃する丈の法案を發布せられことを望む、若し然らずんば當局者の所謂困難なる問題は續々踵を接して起らむのみ。愈々法案提出する場合には雇主と被雇者との中間に立ち公平を維持せんが爲め、普く内容を公示し、公の團體に向て諮問する等なりといふ。此點に於ては余輩の大に贊する所也、兎に角工場法案は輕々たる小問題にあらず、當局者は宜しく三思熟考して可也。

尙之を行はむとするか

いきとし生けるもの誰か死を厭ひ生を欣はざるものあらむや。今や秋高うして、正に是れ無情の遊獵紳士は銃を提げ山野を跋渉するの好時機なりとせむ。天に翔るの鳥、地に走るの獸何の罪かある。抑々吾等は彼等の自由を束縛する權ありや。吾等は異教徒の如く他の動物は凡て吾等の爲めにつくられたるものと信する能はざる也。吾等は佛陀の訓誡を信する



也、吾等は平等の慈悲を信ずる也。自己の苦痛を感ずると共に他の苦痛を了するなり。是を以て吾等は他の禽獸蟲魚と雖も、獲りに苦痛を興ふるの不可なるを知る。蓋し死を厭ひ生を欣ぶは吾等と同じければなり。而して吾等は萬物の靈長なりと誇るにあらずや、思禽獸に及ぶ、是れ靈長たる吾等の義務にあらずや、假令佛陀の教を信受せざるも、口に道徳を唱ふる紳士にして尙之を行はんとするか。彼の翼を張りて大空に舞ふの鳥、自由に曠野を駆けるの獸抑々何の罪かある。吾等は屢々殘忍酷薄の紳士の多きに泣くもの也。

近時教界の思潮

清語——佛敎——新佛敎——中央公論——精神界

我が教界の事頗る寂寥たりと雖、顧みて之を雑誌上に觀むか、言論の主張や意氣軒昂極めて旺盛なるものあり、乃ち吾人の手に觸れたるもの二三をとりて左に思潮の一斑を示さんとす

『清新』第十號の社説に大乘非佛説に對する誤解と題し、劈頭先づ吾人の學術宗敎に對する態度は自由討究にありとて、其旗色の鮮明を示し、而して後大乘聖典の佛説非佛説を推究するは歴史上の事實問題にして、決して敎理の正邪淺深を測るべき信仰問題にあらずとし、大乘非佛説の根底とする所は佛陀人間論にありとて

らむか、非か。『中央公論』家を重んずるの弊害と題し、其實例として大隈家離縁事件に論及せり。

一人を斥けて一家の危きを救へるは可也。一家の危きを救はんが爲に人道を蔑如したるに至つては斷つて救ふべからず

と説き、以て邦人が家を過重するの惡習慣を痛論せり。

『精神界』六合の樞軸と題し 是に於て我は天下の支配者なり日月は我を回りて轉り星辰は我に従ひて動止す。花の咲くは我莊嚴にあらずや、鳥の歌ふは我音樂にあらずや。君王我爲めにあるにあらずや、父母我爲めにあるにあらずや。敵は我に對して敵なり、味方は我に對して味方なり、打つ者我爲めに打ち撫つる者我爲めに撫つ、地球我あるが爲めに重く萬物我あるが爲めに生氣あり。儂なるは、我。大なる我。我は三千大千世界の主人なりけるよ。

幽玄高妙なる詩的文字といふべし。 他は後日紹介することとせむ。

海外時事

獨逸加特力敎徒大會

會場マンハイム、加特力敎對新敎、ヒスマルクの像と惡戯、集合者二萬人、演説は社會黨に反抗、忠女賣買の撲滅

▲獨逸の加特力敎徒は毎年或る場處をトして大會を開くのが例で、去年はオスナブリックでやつたが、今年はマンハイムで開いた。オスナブリックは新敎徒が大多數を占めて居る町で、斯ういふ處で加特力敎徒の大會を開くといふのは

建設し、開敎法、四十有九説にして、最後に純陀が供養を得て遷逝したる釋迦族の一人傑、即ち原始佛敎の祖にして大乘非佛説の所謂佛とは此歴史的人物に外ならず、古來の所謂三法印を具するものは皆佛説なりといふが如きは其名は同く佛なりと雖も其内容に於て大に異なるを知るべき也

と論して大乘經典の歴史的研究を試みんとしたるはよし、されど其經典の歴史的年代の如何に關はらず、何れも信仰の結晶信念生産物にして、之によりてあらはれたる佛陀はたしかに彼の歴史的釋尊已上の偉大なる人格の奥底に達したることを知るなかれ。

『佛敎』は佛敎徒海外觀 光會を起すの議を論じて

彼等若し小眼孔を推し擴めて、海外の風物を知り、幸に身を海外に挺して在來するの概あらば、日本佛敎の廣告として之に過ぎたるものなげん

とて各宗管長、本山住職等が相共に海外渡航の法を講ずべきを勸告せり、到底實行されそうもなき議論なり。

『新佛敎』大道長安、井上哲次郎二氏の宗敎の將來の意見を掲ぐ。井上氏の意見は例の理想的宗敎なり、而して大道氏の分を一見したるが、

耶蘇敎のゴッドは矢張私共の方から見るに觀世音菩薩の變化身と見るので、御座んすから、別にモウ之を外道視して排斥するといふ様なことは御座んせん

とて放浪主義を取り、神は觀世音菩薩の變化なりとは頗る奇怪の考なりといふべし、而して最後に

新佛敎も私共の方とあなただけの方とばかりになりなりました。と、いはるゝ所を見れば、大道氏は今の新佛敎諸君の先輩たる。

新敎徒に對して大に示威的の意味を有して居るのだ。マンハイムも矢張加特力敎徒はやうく半分位しか居ない處である。

▲今度の大會は第四十九回目の大會で、開會は八月二十四日であつた。當日の混雜は非常なもので、停車場は各地より乗込んで來る參會者を以て満たされ、警察は惣出といふ勢停車場の前には縁門が建てられ、旅館、料理屋、咖啡店などは皆旗を出して歡迎の意を表するといふ有様であつた。所が可笑いとは其の縁門を出ると直に大きなヒスマルクの像がある、其の頸にマンハイム公民の名義で美事な花輪が掛かつて

る。これは同地新敎徒の惡戯で、彼れ加特力黨とヒスマルクとは大猿の間柄であることと知つたのだ。で參會者は歡迎の縁門をくぐるときはまことに意氣揚々たるものがあつたが、桂冠を以て飾られたるヒ公の像を仰き見るとは頓に氣持をわるくしたに違ひない。

▲大會は最先に勞働者の集會を以て開始する手筈になつて居たので、式の如く禮拜が済んでから、旗をたて、樂を奏して、行列が始まつた處が、此行列に加はつたもの無慮二萬人程もあつて、とても之を一堂に會するといふ譯に行かないので、四隊に分て、一隊は或るホール屋の坐敷、他の二隊は二間の芝居小屋へ残の一番大きい一隊はつい此頃出來上つた斗りの市立の式場へ集めることにした。此式場は九千人を入

が例で、去年はオスナブリックでやつたが、今年はマンハイムで開いた。オスナブリックは新敎徒が大多數を占めて居る町で、斯ういふ處で加特力敎徒の大會を開くといふのは



れることが出来る獨逸中一番の大廣間で今度此大會で使用するのが嚆矢ださうで確かに九千人は入つたといふことだ。

▲こゝで演説したのは、教監參事ドクトル、シェードラーと大教監ドクトル、チルペートの二人で、シェードラーの演説の大意は、總ての勞働者は赤旗(社會黨)の下に進軍するといふ社會黨の大言の當らざることは、彼等自身も認めざるを得ないのであらう、我等の今日の運動は此大言に對する抗議を意味し、神聖なる教會に歸依するを表白するものである。勞働者の眞に頼とすべき所は資本家にあらず、また國家にあらず、我等の慈母たる教會にあり云々といひ、ネルペートは、加特力教會は勞働者に對して最も温き同情を有し、勞働者の利益の獎進を以て最も重要な任務と見做すものである。世間の生活に就ては凡て一樣の原則が行はれる。時計がくるへば時計師の所へ持て行かなければならぬ如く、社會の秩序が紊るれば造物主へ訴へるの外はない、社會建築の基礎は神の信仰と十戒である、これさへ守れば社會問題の解決は決して難事でない云々といふことを説かれた。

▲晩の八時といふ時刻に歓迎會が開かれた、是に参列したものは六千人程あつて、市長を始め多數の歡迎の辭やら、祝詞やら、挨拶やらがあつて教主レオ十三世、皇帝ウイールム二世、巴丁即マンハイム所在地の太公フリードリヒの萬歳を唱へ深更に至りて散會した。

▲翌廿五日午前十時に第一回の會議が開かれた。先づ皇帝、教主及び太公の萬歳を三唱し且つこの三者に對して服従の意を表する電文を發することとし、それから諸種の決議をした。其の中に「大會は、羅馬教主の地位を以て、基督教國民間の平和を擔保する上に於て重大なる要素にして、諸の國民及び國家間に於ける利害の爭議の仲裁者として最も適當のもの」と認む、是れ實に萬國史上に於て歴々實驗せられたることに屬す」といふことがあつた。

▲而して代議士ドクトルボルシュは羅馬を教主の領地として回復すべきを論じ、「世間或は此問題に就て萬國史の轍は再び回らすべからずといふ、然り王家は興亡の數を免かれざるも獨り教主の位は然らうでない、彼は彼得の岩の上に建てられて、世界の最終まで續くべきものである。されば歴史は此地位を變更する能はざるものである、羅馬は教主の優すべからざる都である云々」と論じた。

▲午後には第一回の公會が開かれて會するもの無慮八千人と註せられた。「ケルン國民新聞」主筆ドクトル、カルダウンスは開會の辭を述べ、加特力大會は信仰を發表し基督に對する服従を表するに外ならざるものと宣言し、大教監ネルペーは現教主レオ十三世の即位廿五年祝祭に就て演説し、代議士ドクトル、ペッヘムは二十世紀に於ける教會に對する襲撃と題し、教會は今日苦戰をせねばならぬ、今や開明戰爭は停

止せるも其精神は依然として尙ほ存續して居る。けれども十分に我々の權利を守るに足る力を有つて居る。我々加特力國民は既に國會に於て地歩を占めた、されば外部よりは決して我々加特力國民に對して如何ともすることが出来ない、そこで我々に反對するものは教會の内部に紛争を生ぜしめ内部よりして破壊せしめんと試みつゝある。彼等は先づ我々加特力教徒をして羅馬より分離せしめ、次に教監、教師より分離せしめ、終に新教に投ぜしめんとするもの即信仰より分離せしめんとするものである云々」と論じ尙ほ自由主義、國民主義、社會主義の如き執れも加特力教會に反對するものなりとて是等に對する決戦の覺悟を促した。

▲超えて二十六日第二回の公會が開かれ、大學教授ドクトルアンライヒは加特力の信仰と科學的討究、醫師ドクトルガッセルトは現時に於けるオルデンの價値及び効用辯護士フアイゲンウインテルは加特力教徒と現代の營利的生活といふ題で演説を試みた。

▲廿七日午前には第三回の會議が開かれて、諸種の問題を討議した。其の決議の重なるものは、獨逸加特力學生保護會の擴張、教會財産沒收に關する歴史研究の獎勵、補習學校に義務的宗教教育の科目を設定すると、大學に於ける神學科教授をして可成各科學生に聽聞せしむるため公の講義を爲さしめ、現代思想の潮流に對して、基督教的の世界觀を演述せし

むると、オルデンに關する制限廢止遂行の件等であつた。  
▲同日午後第三回の公會に於て、教學院長ラウスベルロは「ポニフチウス」協會の任務と題して該會は新教地方に於ける加特力教徒を保護するを以て目的とするもので、決して宗派間の平和を攪亂するものでない、で、該會の行動に依て新教徒にして加特力教に改宗するものもあるも、是れ加特力信仰の力の致す所で、誘拐に依て然るのではない云々と辯じ、フルダ市長ドクトル、アントニーは反決闘運動に就て、大に決闘の不正にして理由なきものたるを説き、加特力教徒は一致團結して此の惡習慣を打破すべしと論じた。

▲廿八日午前開會せる第四回(最終)の會議の論題は社會問題で、處女賣買に就ては、今日尙ほ此の悲むべき現象が存在するは社會の恥辱である、文明各國の政府は諸有法律的手段を盡して之が勸絶を計るの義務があるのみならず、大に實際的手段に訴へて追及すべきである決議し、勞働欠亡問題に就ては、勞働紹介の制を獎進すべきこと、國家及び地方團體に依る豫備勞働の制を講ずべきこと等を決議した。

▲同日午後最終の公會に於て、大學教授ドクトルエツサーは宗教的及び政治的加特力主義といふ演題で、世或は加特力教に宗教的のものと政治的のものとがあるといふけれども、これれ妄の甚しきもので、加特力教は總て唯一の信仰に依て活動するものである云々と論じ、ドクトル、カルダウンスは閉會



の辭を述べ、大教監ナルバートは參會者一同の祝福を祈て、こゝに第四十九回獨逸加特力大會は其終を告げた。  
▲加力特の本領、對新教、對國家、對社會の態度の一斑は右大會の情況に依て窺ひしることが出来る。

豫定の如く八月廿一日ゲノア若、夫よりミランチマールツヒ、マイ  
ンツ、クルンを経て昨夕當地安着仕候、ミランにては教會へ參詣仕  
候、善男善女の信心の様を一見仕候、諸君へ宜敷  
八月廿九日 獨乙ハンブルヒニテ 澤柳政太郎

雜 錄

無我の福音

常盤 大定

深き經驗より流れ出づる水は、混々として汲めども遂に盡くるの期なし、然れども、其味や淡なり、淡なるの故を以て常人は以て掬むべき價なしと爲し、たとひ掬むも味ふに足らずと爲し、たとひ味ふも以て眞味のこゝに存せるを知らず、蓋し常人は醜肥の口に適するを知りて、滋味此外に出でずと爲し、却つて醜肥の如何に短く、如何に一時的なるやを知らざるなり、至人の言は夫れ淡味の如きか、之を聞く何の味なきに似たりと雖、之を嘗むるに至りて眞味の個中に存する

を知り、之を咀嚼する愈々深くして愈々其味の長きを感じずんばならず、百世の師表たる至人の語にして、若し何の取るべき所なきが如きに遇はんか、是必ずや自己の經驗の足らざるが爲か、或は又咀嚼することの少きに坐するものあらむなり、吾人往々にして一言の下に古人の語を取捨し、批評し去りて得々たることあり、誤れるの甚しきものなり、予常に彼文人書なるものに對し、峻崑絶壁屹立千丈、今將に墜落せんとするの勢あるものを觀て、從來思へりき、天下豈斯の如き山あらんや、是蓋し邦人が支那人の戯墨を摸倣せるに過ぎざるのみと、豈圖らんや、是遂に戯墨に非ずして、天下或は之に過るの妙景あらんとは、一日甲の御嶽と、野の庚辛山とに遊ぶ、其奇、其快到底文人書の擬すべきにあらざりき、予此時謂へらく他の言ふ所、説く所、容易に捨つべきにあらざり、況んや至人の語をやと、至人の境界は吾人の想像の外に在り、若し吾人の境界を以て之を付度するあらんか、正鵠を得るを期し難く、よし正鵠を失せざる迄も其妙味を掬して混々たる源泉に廻ること能はざるべきなり  
洪鐘聲なし、之を叩きて而て其聲を聞き得べし、而も之を叩く撞木小なれば其音も小に、撞木大を加ふるに從て其音亦大を加ふるを見る、至人の語は夫れ亦洪鐘の如きか、一見一聞せるのみにては遂に何等の妙なく、何等の奇なしと雖、十の實驗を経たるもの、撞木に遇へば、十の響あり、百の經驗

を重ねたるもの、叩くなれば、百の響を反すを見る是を以て顔回歎じて曰く、嗚呼之を仰げば愈々高く、之を領れば愈々堅しと、此歎や顔回にして初て能く之を發し得べきもの、若し常人にして夫子に對せんか、夫子は唯是孔丘のみ、陽虎に歸せしものならんのみ、

佛敎は夫れ無我の福音か、八万四千法門は爾く大なりと雖、要は唯人類をして無我ならしめんと期するに在り、十三宗卅六派宗派は若く多しと雖、結局無我の福音を傳ふるものに外ならず、佛陀の福音之を披けば以て六合を被ふべしと雖、之を卷けば無我の二字に結歸するを得べし、無我の妙味は口得て之を説くべきにあらず、筆以て之を記すべきにあらず、唯實驗して其味を掬すべく、實驗愈々深くして愈々其妙味を加ふべきものか、

世は苦なり無常なり、苦、無常は久しく住すべきにあらず、吾人須らく無我の域に入るべし、能く無我の域に入れば吾人能く寂靜涅槃の妙境界に遊ぶを得べしとは、是原始佛敎の教ふる所、佛敎の現時煩瑣學究何れか其中樞なるやを判じ難きが如くなるも、必竟此外に出でず、此單純なる福音能く千古に通じて其光彩の益々陸離たるものあるは、無我の洪鐘叩けば愈々其響を高くし、無我の清淡、掬すれば益々其眞味を加ふればなり、

古今哲學の數も多く、東西宗教の數も多しと雖、無我の妙

境界より發せるものなればにや、無我を標榜せるもの未だ之あらず、無我のものたる佛敎の特色にして而も其長處たる所、獨り佛敎にのみ之を觀て、他の哲學、他の宗教には絶て之を見ざる所なり、吾人は自力よりするも、他力よりするも、一に唯無我の妙境に至りて初て佛敎の本旨を得、宗教の目的を達すべきなり、然れども無我のものたる、佛敎者に取りては餘りに耳に熟して珍らしからず、世人に取りては餘りに消極的にして妙ならざるの感を與へ、直に無我の妙境を目的とする佛敎者稀れに、遂に無我の清淡なる眞味を掬せんとする世人少きは慨すべしと爲す、

顧るに維新の際に於ける政治上の大變動は、忽ちにして冠履顛倒の狂態を演じ、昨の諸侯をして今の奴僕たらしめ、昨の匹夫をして却りて今の將相たるに至らしむ、眼前此事實を目撃して野心物々たらざるもの蓋し稀なり是に於てか天下の人心は皆一時に動搖して、秩序を重ぜず、歴史を蔑にし功名富貴手に唾して取るべしと爲し、爲に天下悉く投機的に傾き、或は一舉手忽ち相印を帶んとし、或は一攫乃ち千金の利を得んとし、滔々として底止する所を知らず、人心毫も守る所なく、從て安んずる所なく、以て現時に至れり、刮目して見よ、現今功名の裏面には幾多の罪惡あり、富貴源泉には必ず不義伏在せるを見るに非るか、こゝに一事を遂げたるものあり、世人皆曰く彼は誰に資縁して以て此其功を得たるぞ、如何に



運動して能く其業を遂げたるごとくに一官を得たるものあり、世人皆曰く、彼は誰の駟馬ぞ、彼は如何なる手数を弄せしぞ、彼は必ず朋友を賣りしならんと、是を以て正直は愚の別號となり、正義は世抜け者の唱ふるもの、如く、天下唯御都合如何によりて云爲せんとす、其斯の如きに至れる原因如何、維新の大革新に於ける社會の大變動よりせる人心の動搖に外ならざるなり、動搖は竟に政治上のみに限らず、經濟上のみに限らず學術上投機者流を見ると頻々として然り、泰西の文物の急激なる輸入に乗じ、一夜作りの學者の出るを雨後の筈の如く今日講堂に聞くの學説は明日の新聞雜誌上麗々しく掲載せられ、一冊の書籍を翻譯すれば忽ち其途の學者を以て自任し、世人之を許すに難んぜず、爲に世人の未だ注目せるものを捉へ來りて、一夜に忽ち其途の通人たるの稱を得ること往々の事たり、是豈投機的氣風が學術上に侵入せる證據に非るか是を以て笈を都門に負ふの學生常初郷關を出るや、一定の目的を有し一定の進路を取らんとせるもの、一たび都風に化せらるゝや、忽ち内心の動搖と和し、一年にして忽ち學者たらんとし二年にして乃ち専門家たらんとし、甲の學校を去りて乙の學校に入り、乙校を去りて忽ち丙校に入るが如き、経路を來し、中に一二の成效せるに似たるもの、遂に百千の學生の方向を誤らしむの縁を爲し、人心の動搖は遂に無邪氣なる學生をも驅りて此投機的徑路に出でしめたり、投機

的傾向上下を通じ、物凡に互りて天下に彌漫す、將來の人心炭々として又危き哉、  
 軌近宗教を口にし筆にするもの、月を追ひて益々多きに至り、學者記者、眞摯なる態度を以て之を論ずるに至れるもの、是蓋し投機的傾向に飽ける人心が、漸く正當に依らんとする反映たらずんばならず、此際中に時弊に適中し、能く人心の動搖を鎮靜し得べきものは獨り無我の福音なるべし、

萬國東洋學會盛況に候、有益なる報告なかく多く、獨乙各大家の東洋學者は大抵出席仕候。はるかに御清福を祈る  
 九月一日 獨乙ハンブルグにて 渡邊 海旭

### 病より得たる教訓

和田 鼎

一、人間は結局人間  
 理屈の上からいへば人間は其精神の上に於てもまた肉体の點につきても、結局弱いもので不完全のものであるといふことは誰しも拒むことを得ないのであらうと思ふ。鬼神をも取りひしぐ様な荒男でも生れてから死ぬる迄、少しも病氣にかゝつたことはないといふものは五千万の同胞中果して幾人あらうか。喬木はとかく折れ易く平素健全である人ほど却てこ

ろりと病氣の爲めに亡くなるのは數々吾々の目撃するところであらう、あんな撲つても死にそまない人がとむしろ不思議がる様な例は尠くないことである。また平素意志の修練を積んで千難萬艱の一時に降りかゝても綿々としてこれに堪ぬ、笑つてその難關を切り抜ける程のあつばれな大丈夫と見ゆる者でも時に思はざる誘惑にもろくも内甲を見せて降参するためしもまた珍らしとせぬ。あの男がまさかと思ふたが實に意外であるとの歎聲を耳にすることも尠なからぬやうである、千萬人中より二三人の身心共に健全といふ人かあらうかもしれぬけれども、やはり人間は結局人間で洗ひ晒らした裸体のまゝをさらけ出したらどうであらうか、やはり何處かに汚點を發見するに相違なからうと思はれる。此頃一二の悪徳新聞が正義の名の下に社會の陰事を摘發して新聞の賣高を増そうとして居るのがあるが、あれはすこしも汚れたものを洗滌して清淨にしたいといふ、考があつてするのではなく、汚れた點を公衆の面前にさらけだしてさあ／＼この汚れたところを御覽しろといふ風で洗濯はやめて汚れの廣告をやつて居るのである、ところが人間はとかく奇を好む動物だから少し普通のものと異つたものは何んとなく見たいものでござてこそわい／＼と汚れた物を廣告する悪魔の下に群集するのである。ところが人間はまた物に慣れると神経が麻痺するものであるから、初めは眉を盛めて見たものは始終目の前にあると遂に何んとも感

じなくなる、丁度屠牛者が牛を屠るのを一匹ひねる程にも思はぬと同じ様に汚れたものを見て厭惡の感を生じなくなる。畢竟社會人心の道德感念を麻痺させて仕舞ふ様な結果を來すのみならず、また一方には其罪惡を消極的に教へることにもなつて所謂百害あつて一利なき仕方であると思ふ、丁度汚れ物を洗濯する時に隣り近處へ汚物を持ち廻つてあの家にはこんな汚れものが澤山あるから御覽なさいといふやうなもので内々で早く其洗濯をして清潔にすることを忘れて居る様な話で、狂愚も其極であると思はれる。彼等は實に正義の名の下に大罪惡を犯して居る容易ならぬ徒者であると思ふ。そんなことで社會の風教が保たれると思ふのは實に淺薄極まる考を叫ばざるを得ないのだ。

### 二、病は人を眞面目ならしむ

ちと話しが餘談に走つたがつまり「人は弱者なり」といはれると弱いくせに癩にさわるのか人間で、やはり弱いものに相違ないのだがそれでも身体が比較的健全であると兎角我が我がさきに立つて、野心も燃ゆれば貪慾も萌して健康が増せば増す程その力は強くなつて人を倒しても自分がさきへ出るといふ様な考にもなつて來るが、さて、病氣になると餘程考が變じて來るつまり、弱いといふことの自覺が萌しをめる夫れと同時に眞面目に自己の爲した行爲につきて沈思冥想を



凝らす様になる、今迄は何とも思はなかつたことでも大に氣にかゝり出す、一々嚴密に公平に批判を下して見るといやはや實に汚れたる不完全な我であつたとの自覺かひし／＼と思ひ當つて少からぬ苦悶を惹起して来る。健康の人の目から見れば實に取るに足らぬ様な些細の事柄までか自分には大變大きな事の様に考へられ、色々の手落やら種々の間違やらは皆自分の責任を盡さなかつた爲めに起つた様に感じられて、立つても坐つても居られぬ様な氣がして其苦悶は實に甚しいことになる、こゝに於てはまた一方に世人の爲すところが一々皆無意義の様に思はれて来る、何の爲めに人間は生きて居るのであるか又何故に生きて居らねばならぬのであるか、畢竟人生の意義といふものは那邊に存在するのであらうか。金力萬能主義と強者の權利の下には弱者は常に壓迫せらるのかか人生の真相であるか少くとも今の社會は弱肉強食の有様で浮か／＼して居ると何時の間にやら溝壑に顛轉する様不幸を見るのであるが、かゝる殺風景極まる野獸的狀態を指して所謂文明と稱するのであらうか。我はどうしても人生をそんな馬鹿らしいものとは思へない、何か崇高なる偉大なる意義があつて知つて居るものは勿論のこと、知らぬものでもやはりその大なる意義を漸次に了解する時か来て、極めて、平和に極めて愉快に又極めて活潑に人生を送るべきものでなくてはならぬと思はれる。さてそんなら、人生の意義は何であ

三、人の病は猶天象に風雨あるが如きか

丁度病氣で居る間に屢々雨が降つたが、それについて思ふたことがある、人間に病氣のあるのは丁度天象に風雨のあるのと全じ様な者であらうと、人は健康の時に於ては随分思ひ切つたことをやり得るが、一旦病氣になると慾心が餘程薄らいて心の上には確かに一服の清涼劑を投じた様になる汚れた心が餘程清らかになる様である、天氣の晴れ渡つた時は紅塵空中に充滿して空氣は大變に汚れるが、一雨ざつと降つて空氣の汚れを洗ふと實に新鮮になつて雨後の大氣は實に心地がよい。しかしまた病氣も絶えずわづらひ通して慢性となつて、所謂眞正の病的になつてしまつて更に活氣を恢復し來ることは六ヶしい。雨でもそうで入梅の時の様にじと／＼と毎日／＼降りつゞいては、却て不健康な空氣になつて仕舞ふのである、急性の病氣でとても生命が六ヶ敷いといふ危うい勢戸際に乗るかゝると、急に一切の邪念が無くなつて眞に眞面目になる。暴雨風は丁度これて天柱折れ地軸も欠くる斗りに荒みに荒んで人の世の破滅かとも思はれる程の暴風雨は實に壯快で、弱い家や弱い木などは皆不斷エラッウにして居たものが根からくつがへされて、風伯の前に見苦しい戦死をとげて居るところなどは、我々に偉大の教訓を興へる様な氣がするのである。

るかといふことになるが、病氣の間には中々この問題は解くことが出來ぬ、或は我等は國民の一人として國家に對して少しでも善きことをするのか目的であるとか、我は社會に對して出來る才の力を盡して働らくのか目的であるとかといふ風に色々に考へて見るけれども、是等の事は一應は尤もの様に感じられるけれども、何れも皆便宜上論つたりするやせん。都合が悪い位の事で結局の理由は少しも見出すことが出來ぬ。つまりこの浮世の上のごと／＼した事物の上に之を求めやうとしても、更に確かなる根底を見出す事を得ぬやうに考へられる、そうなるに愈々苦悶は増して来る、そこで色々先覺の書かれた書物や御經などを讀んで見るが、こゝに開きがつかぬ、人に色々話を聞いても耳には止まらぬ、夫れでやはり悶々に悶えて居る、結局死といふものが只一つこの苦悶を除くものだといふやうにも考へられ、何だか譯のわからぬところを譯も解らず無意義に生きて居るといふ事がさつぱりつまらぬことにも考へられ、随分死に兼ねぬ様な心もちにもなる人は病的現象であるといふかも知れぬが、自分にはどうもそうとは思へぬ、却て譯のわからぬのを平氣で居る人間こそ病的ではなからうかとさへ思はれるのである。こゝに風な考は病的であるかもしれぬが只人をして本氣にせしむる丈は確である、故にわれはいふ、病は人をして眞面目ならしむる藥なりと。

四、人生の意義は浮世の上にあらず

色々様々考へて見て眞面目に人生問題の解を得やうと力めて居ても、病中は中々安心か出來ぬ、結局煎じつめて見るとどうしても人生の意義といふものは、人間の作つた法律や規則などの間に求めても得る事が出來ないそれは木に縁て魚を求むると一般である、我等は此野獸的世界をして如何にせは極めて平和な愉快な樂土にするとか出來様か、それは逆も弱く不完全なる汚れたるわれら自身の力では醫することが出來やうと思はれぬ。一ツの大なる力を得て其力によりて幾分でもそれに近づけしめようとせねばならぬ、まづわれの汚れた處は佛の偉大なる慈悲の救ひを得ねばならぬ。結局我等はどうしても完全圓滿なる佛によるより外はない、その佛によりて得たる力により樂土の面影をこの世の上に實現せしめんとするのがわれ／＼人類の大なる天職でそうするか人生の意義であるといふ様に考へられる、即ち我等は佛の救を信じ、佛の力によりて一切の人類を救済すべく人生の上に働かなくてはならぬものであると信するのである。

五、苦悶は同情の母なり

苦悶に苦悶を重ねた上句に於て、段々微かながら光明を認めて來る様になるものと思はれる、人にして苦悶をせぬ者は未だ共に語るに足らざるもので、その精神的なると肉体的なるとを問はず、とに角苦悶した者は人生に就て大に眞面目で



又深厚なる同情の念か湧く様である。同情といふても只無暗に人か泣くから一處に泣くとか、人か笑ふから一處に笑ふとかいふのか同情ではない。如何にもして人の苦悶を抜いてやりたいといふ同情である、これは極健康な人は病人を見てどれ程苦しいのやら實感か起らんか、一度病にかゝつた人は俗にいふ同病相憐むて同情の念か深い精神上の苦悶を経た人はそれと同様にまた人の苦悶に對して深厚なる同情を以てその苦悶を抜いてやらうといふ風になる。つまり佛の慈悲といふは無限の同情で迷へる人類に對する極深無際(ごくしんむがい)の同情であると思ふ。

### 旅より

旭村生

兄よ、予は歸朝已後未だ會て試みざりき精神的快味を感じつゝあり。一昨日兄と別れてより夕方水戸に着せしが、香川君停車場に迎へられ、相伴はれて其家に行けば、信者は小さき清らかなる家に滿つることを乞も求道學舎のその如し。數少きも眞面目に道二席の信仰談寧ろ之を聞く人よりも説くもの歡喜の情に堪へずなりぬ。強めてとむるまに、香川君の許に宿りぬ、一別以來の師弟の情湧くが如きもの

あり。我伏しぬ、朝起きぬ。香川夫妻は近時結婚したるなり、早きに起きてかき、香川君亦起きて戸を開き杯して妻を助く、理想的の好傳道士、清らかなる家庭、彼、佛を禮し、我亦經を説く。襖を隔てゝ人の泣くあり、信者の一人は蚤に來りて私かにさして感泣せるなり、此信者と他に猶一人の信者あり、何れも信仰の精髓をつかみつゝあり、午前中二人の信者に法を説く。正午香川君に停車場送られて水戸を發す。瀛車中より窓外の景色を望む、海青く天亦清くして恰かもイタリヤの景色の如し。殊に薔々として丸く茂りたる松の木が海岸に一二株づゝたてる様ベックリンの畫其儘の景色なり。

勿來關など懐かしき名所を窓外に眺め、三十二年の今頃道交會演説の爲めに來りたる時の事など想起して古往今來を考へつゝ、夕方仙臺に着しぬ。三好兄は迎はれたり、道交會の人々も十數人迎はれたり、あはれ清らかなる佛の御子懐かしき事限りなし。昨夜來三好兄と枕を並へて信仰を語りぬ、今朝早きに起き三好兄は松島に往く、高等學校のポート、レス準備の爲めなり嗚呼本日清遊の松島予が數年前大苦悶の舊跡如何に懐かしきや。明十八日午前道交會寄宿寮にて、午後は五城館にて

公會夜は私會、何れも道交會なり。十九日又寄宿舎と大谷派説教場にて坐談あるべし、二十日は師範校と高等學校の尙志會にて話す等。二十一日は又もや宇都宮に清らかなる傳道士訓彌君を訪はむ。二十二日頃諸兄と相會して語るを得むか。

十七日 朝五時半 仙臺にて

### 視察

## 勞働院

(英國貧民救助制)

池山 榮吉

●私宅救助と營造救助。貧民救助の方法に私宅救助と營造救助との別がある。私宅救助とは被救者が其私宅に於て保護を享けるとをいひ、營造救助とは孤兒院とか養老院とか慈善病院とかいふやうな營造内に被救者を收容することである。

▲勞働院は即この營造救助の一種で、其の趣旨は、勞働の出來る身体を持ちながら公の救助を仰がなければならぬ程の窮態に陥つた者は、到底自力で生計を營む能力のないことを表示したものであるから、彼等に對しては救助を與ふると同時に一定の監督を行ふ必要がある。で、この監督を履行せん

には、斷えず當人の行狀から懶振を監視するとの出來る營造に收容するに如くはない、而して其の救助は出來得べきだけ低い程度に止め、被救者をして之に甘んぜしむるやうなことがあつてはならない、之が爲には彼等に課するに不便なる仕事を以てし、規律を嚴にし、男女を別居せしめて一時親族の交通を停止し、酒、煙草の如き嗜好品を禁ずる等のが必要で、是等のことは營造救助に於て初て實行し得べきものであるといふのである。が、實際は單り勞働能力あるもののみならず、老人たると幼者たると、病者たると健康者たるとを問はず、將たまた、救助を仰ぐに至れる原因の何たると、救助を仰ぐ必要の一次的なると永續的なるると論なく、諸有種類の窮民を一所に收容して了つて、爲めに一般被救者に對する取扱が、或は嚴に過ぎ、或は寬に過ぐるの弊に陥り易く、また實際陥つたところのあるは後に述べる所に依て明かである。要するに、勞働院とは一面、救助を與へ、一面、勞働を課する營造であるが、夫の勞働者殖民地(第八十四號參看)の如きは私の慈善事業たるに反し、これは純然たる公の救貧行政である。

▲勞働院の最も系統的に發達して居るところは英國で、英國の貧民救助制はこの勞働院を以て基礎として居る。即英國の救貧行政に於ては營造救助が原則で、私宅救助は例外になつて居る。獨逸では此反對で私宅救助が主となつて居る。今



回は主として、英國の勞働院に就て、御話して、獨逸に於ける救貧行政の詳細は後日に譲るとしやう。

●エリサベス救貧法 英國で國家が救貧行政にそろく手をつけてきたのは、第十四、五世紀頃からのとて、其の頃はまだ一般の貧民救助は全く教會がやつて居たもので、國家はたゞ浮浪、乞丐の徒に對する警察上の規則を設けたに過ぎなかつた。

▲宗教改革に由て教會の慈善財産が國家に屬してからは、貧民救助は主として國家の責任に歸するととなつたので、ヘンリー第八世は、千五百三十六年の法律を以て、一教會區を以て一救貧區とし、各區は勞働能力なきものは之を救護し、勞働能力あるものには仕事を與ふるの義務ある旨を定めた。即國家は救貧行政の事務を各教會區に委任して行はしめ、而して其の費用は寄附金に依て支辨することとした。寄附金募集の任に當つたものは、初は教師及び地方吏員であつたが、後には特別の寄附金徴收吏が任命されて、且つ任意に寄附せざる者に對しては、段々と強制が行はれる様になつたので、名義は寄附でも其實公課的のものとなり、遂に千六百一年の「エリサベス救貧法」に於ては一躍して救貧法の規定を見るに至つた。

▲從來の立法では貧民警察の視點が重きを爲して居たのに反して、エリサベス女王の救貧法は主として貧民救助の視

るものとし、該院に收容さるゝを拒む貧民には、他の救助を與ふるに及ばぬといふことに定めた。所が其の勞働院といふところは決して樂なところでないの、實際困窮の極度に達した者でなければ、濫りに保護を要請して來ないといふ風になつて、其結果救貧費の上にも著しく減少を來し、千六百九十八年には其の豫算が八十一萬九千磅であつたのが、千七百五十年には六十一萬九千磅、即丁度四分の一を減ずるやうになつた。

▲此の折角の成績を減茶く破壊して了つたのが、夫の千七百八十二年の「ギルバート條例」で、該條例がエリサベス救貧法及び勞働院の精神に反して、勞働能力ある者を救助するに、單に勞働を周旋するに止らず、尙ほ其の取得する勞賃が、條例規定の額に満たざる場合には、不足額を補助するの制を採りたるため、貧民の遊惰の風を助長し、勤勉なる良民を苦しめ、其の結果救貧費の如きも従前に比し殆んど十倍以上の額に上り、道德及び經濟の上に大害を及ぼしたるは前號『勞働の權利』に於て述べた通りである、之では堪らぬと、矯弊の策を講じたのが即千八百三十四年の改正法で、つまりエリサベス救貧法の精神に従て、再びもとの勞働院主義に逆戻をしたのである。

●千八百三十四年の改正救貧法 千八百三十二年の任命に係る救貧法實效調査委員は、三十四年二月浩瀚なる報告書を

點から立案されたもので、從來の立法には浮浪乞丐に對する罰則が大部分を占めて居たのが、エリサベス救貧法には一も其の規定がない。該法は被救者を(一)幼者、(二)勞働能力ある者、(三)勞働能力なき者の三に分ち、幼者の救助手段としては、可成丁年に至る迄徒弟として住込ませる方針を採り、勞働能力あるものには、仕事を供給し、勞働能力なき者は之を救貧院に收容するといふことにし、費用は特別の税を以て支辨し、從來の如く収入を標準として支出を定める主義、即入るを計て出づるを制する主義をやめて、支出の必要に應じて税金を取立てることとし而して其の行政事務は矢張教區に委任して治安判事の監督に服する特別の吏員をして執行せしめた。

▲此の救貧法は現今に至る迄、英國救貧法の基礎となつたもので、該法の發布以來、幾多の更改はあつたが、多くは其の主義原則を益々發展したに過ぎないので、時としては大變更を試みたことがあつても、結局また元の主義原則に立戻らなければならぬといふ形勢に立至つた。

●勞働院とギルバート條例 英國では、千六百九十七年に「プリストール」に出來た勞働院が抑の濫態で、續て「リマウス」其他二三の地方にも出來たが、其の成績が良かった所から、千七百二十三年の法律は、廣く各地に此制を起さうといふので、各救貧區は獨立若くは聯合して、勞働院を設くるの權あ

發表し、夫の「エリサベス救貧法」は實に「英國救貧法の基礎たる原書」で其主義は毫も間然する所のないものである。救貧の實效の擧ると擧らざるとは、一々この主義の嚴正に行はると否とに係ると論じた。

▲同年八月右委員の考案に基いて議定された法律は要するに左の三點に重きを置いた。

一、中央救貧廳を設置して全國の救貧行政の指揮監督を司らしむること。

二、從來の救貧區たる教會區を合併して、大なる救貧組合とし、之が機關として地方參事會を置き事務を辨せしむること。

三、各救貧組合には少くとも一勞働院を設定し、可成私宅救助を制限して、營造救助、即被救者を勞働院に收容するを以て原則とし、院外に於て救助するは已むを得ざる場合に起り、院内の生活は規律、給養及び勞働の點に於て、最下級の獨立の勞働者の生活よりも、一層劣悪なるものとなし、入院すると夫れ自身が、實際救助の必要の切迫なることを證明する様に仕組むこと(Workhouse-test)。

▲其後今日迄の趨勢は、中央救貧廳の權限が益々擴張して、救貧組合の區域が愈々擴大されるといふ工合で、畢竟前掲の原則が段々と發展しつゝあるのである。たゞ一つ異とすべきは所謂「救貧籍」の制度が漸々變遷しつゝあるとて、救貧籍と



は被救者を何れの地に於て救助すべきやといふ問題で、もとニリサベス救貧法では被救者の現に居る所、即滞在地に於て救助するとなつて居たのであるが、チャールズ二世が千六百六十二年の法律で之を改めて被救者を救助するは本籍地の義務で、滞在地は其の責に任ずるに及ばないといふことにした。爾來引續いて此制が行はれて居て、千八百三十四年改正の際も其儘になつて居たのであるが、それが今日では、本籍地も、また或る條件の下に滞在地も、兩ながら救貧籍と認めらるやうになつて、實際は寧ろ滞在地のみを以て救貧籍とせるかの如き觀を呈するに至つた。これは蓋し時勢の推移の然らしむる所である。尙ほ救貧籍のとは後日別に御話する機會があると思ふ。

◎現在の制度及び状況 現在の制度は大体千八百三十四年の改正法に依て居るので、先づ其の機關に付ていへば、一番上に中央救貧廳があつて全國を總轄し、全國は更に十五の監督區に分れ、各區に一名の監督が居て、各監督區にはまた更に幾多の救貧組合があつて、各組合には地方救貧廳、即地方參事會がある。參事會は組合より選舉された名譽職から成立つて居て、其の下に有給の書記及び救貧吏が居て實務を執行するといふ工合に出来て居る。

▲救助に關する手續はといふと、申請者は先づ救貧吏の所へ行て事情を述べる救貧吏は一應の取調をして次の參事會に

一八五二	九二〇〇一七〇九八二三八〇一八一四	五、一五
一八七二	一四〇四六七八四三七九九九八四二六六	四、三四
一八九三	一六九一五五五〇五四四九六七四二〇四	二、二九

是れに由て觀ると私宅救助の方が營造救助よりも遙かに多いが、私宅救助が追々減退して、營造救助が段々と増加し、營造救助が増加するに従て、被救者の總數が減少する趨勢を認めることが出来る。

▲千八百四十三年の改正法律では、勞働院は獨り勞働能力あるもののみならず、總ての窮民、即子供も、勞働能力なきものをも收容する所となつて、在院者を(一)勞働能力なき男子(二)十五歳以上の勞働能力ある男子(三)七歳乃至十五歳の少年(四)勞働能力なき女子(五)十五歳以上の勞働能力ある女子(六)七歳乃至十五歳の少女(七)七歳以下の子供の七部に分ち、各部門の交通を禁じてある。夫婦と雖も同居することが出来ない、親子も一日しか面會することが出来ない。男子の勞働は木を割るとか、繩を織うとかいふ粗雑な仕事で、女子の掃除洗濯が重である。而して勞働に對して勞賃を支拂ふことはない。

▲が、斯く諸有窮民を十把一とからげに網羅して一所に收容するときは、勢ひ、救助をして成るべく被救者の特別の事情に適應せしむるといふ原則、所謂個別主義に反し、其間幾多の弊害の生ずるは數の免かれざる所なので、近時漸く幼者、

於て報告する。其時には申請者を招喚するのが通例で參事會は右の報告に基りて、申請者に對し必要の訊問を發し、救助を與ふべきや否や、もし與ふべしとすれば、如何なる種類の救助を與ふべきかを決定する、書記は之を救助命令書に記入して救貧吏が執行するといふことになつて居る。尤も急迫な場合には救貧吏が一時假りに救助を與へ、後に參事會の議にかけるともある。

▲費用の大部分は救貧税、他は國庫の補助金と特別の基金を以て支辨する。千八百九十七年度に於ける救貧費總額は一千二十一萬五千九百七十四磅で、内七百六十三萬七千二百二十磅は救貧税に依て取立てた分、當時の人口に割宛てると一人前三圓五錢程に當る、之を夫のキルパート條例施行の當時一人前七圓程の割に上つたのに比すれば半分である。

▲救助の種類に付ては、營造救助を以て原則とするとは前に述べた通りで、中央救貧廳は可成私宅救助を制限する方針を採り私宅救助を與へ得べき條件を限定して、若し之に該當せざる場合に於て私宅救助を與へたる時は、當局吏員をして費用辨償の責を負はしむるなど、嚴格な規程を設けて、頻りに地方救貧廳を警勵しつゝある。私宅救助と營造救助の關係は左の統計に依て知ることが出来る。

年度	營造救助	私宅救助	總計	人口百人
				に付き

病者等の爲めには特別の營造を設立する様になり、また勞働能力あるもの、内でも弱い者と強い者とを別々の營造に收容せんとする傾向がある。

▲之を要するに英國の勞働院は、主として公安上から割出したもので、慈善的視點から任組まれたものでない、されば被救者に對し動もすれば嚴に過ぐるの嫌あるは勢の然らしむる所で仕方がない之が欠を補ふは慈善事業の宜しく努むべき所である。で、慈善事業組織協會の如き大に此點に注意して、例へば過失なくして窮乏に陥り、若くはその此に至れる情狀の大に諒すべきものがあつて、勞働院に入院せしむるは如何にも氣の毒の感ある者等に對しては可成慈善事業の側より救濟せんことを務むるさうで、かく公私の共力することは一般の貧民救助の上に於て極めて必要のこと、たもはれる。

●利害得失 千八百八十八年及び九十二年に、國會で救貧調査委員を設けたとがあるが、該委員は左の三點に於て勞働院の利益を認めたる

- 一、被救助者に總て其の必要なるものを給付するは營造救助に限るとで、私宅救助は兎角不足勝て且つ監督が不行届たるを免かれざる、
- 二、被救者を營造に收容して、其の自由を制限するは、一般人民をして之に鑑みる所あらしめ、其の勤儉の風を鼓舞する効あると



三、營造内に於ける勞働は世間の勞働に競争する憂がない、之に反して、私宅救助に於ては、被救者は救助を當てこみにして、他の獨立の勞働者より、安い勞賃で需に應じ得るので、爲めに一般市場に於ける勞働價格に影響を及ぼす虞あること

▲勞働院の主たる効用は國に餓死する者なからしむるにあるので、而して其の特徴は院内生活を極めて不愉快のものたらしむるにある。或る人が英國の勞働院を視察して、英國の勞働院は實に其名に負かない、少くとも貧乏世帯にせよ一度び一家の幸福を味つたもの、堪得る所でない、自由の制限、難澁の勞働、單純な食物、憐れな仲間、殊に家族の別居、是等のことは勞働院といふ語音を監獄といふに近似せしむるといつた。

▲抑も勞働院を斯くも嚴重な制とする所以は、主として、濫りに救助を仰ぐものを防止せんが爲め即救助の濫用を避けんが爲めである。して見れば、その濫用の虞ある者を勞働院に收容するは固より至當のことであるが、その虞なき者をも入院せしむるは聊か失當の措置といはなければならぬ。子供や勞働能力なきものは本來獨立して生活するとの出來ないもの即救助の濫用の虞のないものである、然るにそれを勞働院に入れて、よし仕事をさせないにせよ、一般の嚴重な規律に服せしむるといふのは臨に失するといはざるを得ない。是等の

者は宜しく別の營造に收容してやるやうにすべきである。また勞働能力あるものうちでも、懶惰放縱の結果被救者となつたものは、是こそ眞に勞働院の正客であるが、然らずして一時救助を仰がざるを得ざる状況に立至つたものを、直ちに勞働院に入院せしむるといふも是れ亦稍々氣の毒の感なきにあらざるのみならず、若し之を入院せしむるに於ては、其の自由を制限するの結果、自然他に適當の仕事を見付けて、再び自營的生計を立つる時機を後れしむる憾がある。されば此種の窮乏者に對しては營造救助よりも私宅救助を興ふる方、寧ろ得策であつて加之に安上りであるのである。

閑 文 字

▲西洋の婦人は財産がなくては相當の處へ嫁付ことは出來ないやうである、又男子も持參金の多い方を望むといふ次第で、まるで財産結婚するやうだが、ケチンボーといはるゝ支那人の考はなほ「面白」。うにはなんで支那人がこんな懲罰主義だといふに、皆結婚の爲め財産を貯へるをうた、さて結婚の式を舉ぐる時それば「町重なもので結婚は人生の一大事といふ工合に親類眷屬共を集めて大祝宴を張り今迄貯蓄した財産を過半贈らしてしまふやうである。これがため結婚後非常に窮境に陥るものが多いさうだ、支那人としてはなほ「思ひ切たやり方である。

▲一人の娘を持つてる主婦が語りて云ふには、娘も近頃學校で縫製や算理を習うて居りますが、兎角理屈が多くて實地にかけるさ少しも役にたちませぬ。此間も客來があつたら、御用走を捲へて見ようといふと命じられた處が、先づそろ／＼本をひらけておして、やれ、やれがあるや、これがあるやとて學校で教へられた難形其儘やる語りです、やれ、やれ急場の際に合ふことは出來んやうです、何れ女の次にし

て突れやうとて、大笑ひしたことがありすと笑ひながら語られた。今の女學校では理想のみ高くて實用に通用せぬものは此一例によりてもわかる次第である。▲人の格別注意を惹かない所で割合に骨の折れるものは、雑誌の編輯である、体裁は勿論のこと、時によること々々字数を勘定せねばならぬ、あまり原稿が汚ないこと、き改めればならぬ、なほ「世語の」である、本誌に筆を執るるに方にて原稿を寄贈にゆく人は先づ高陽兄であらう。敢て能書といふ譯でもないが、一字一劃決して他の領分を侵す事はない、さら／＼と書き流すけれどと誤字もなく塗抹するやうな事もない、ごら／＼いへば活版屋の喜ぶべき方である、手紙なども随分こま／＼から丸で女性的の文字であるといふてもよ／＼やう、又勢舟兄は能書丈ありて頗る美事で、塗抹はあるやうだが、急いし時でも決して粗雑なる書き振りはしない、獨り旭村兄に至りては全く英雄的文字である、少し位他の領分を侵すならばまだしもの事なれども、甚しきときは一枚の原稿紙に三行位より書かない時がある、書簡なども普通の郵送で送送さるゝこと極めて少ない、一本の巻紙が三回目に大抵破きてしまふといふ位だから、如何に大きくして雲煙飛躍て居ることが知らるゝであらう、僕はこんなことをいふ資格がないが、旭村兄は目下留守だから、幸に原稿檢閲の厄を免れて書くこと出來た、歸て來たら乾度叱られるであらう。

信 塚

佛弟子小傳 (七)

近 角 常 觀

尊者大住

尊者大住とは摩訶迦多衍那 Mahakatyayana 即ち俗に迦旃延と傳へて居る人である、此人は傳道に於て著しき伎倆を有して居るので名高くある、此名は此人が未だ佛弟子とならざるまで、屬して居つた婆羅門の姓である、此人の實の名は那

羅陀 (Nanda) といふ、佛陀が降誕せられたるとき、悉達太子子を見むと欲して來りたる、大占師阿私陀仙人 (Asita) の甥である、當時那羅陀は年僅かに八歳の幼童であつたが阿私陀に伴はれて、來りて同じく、皇子としての佛陀を拜した人である、當時阿私陀が皇子を抱きて、つく／＼其圓滿なる相好を拜し忽ち悲號啼哭して或は歎歎し或は嗚咽し、滿面涙を流して如何にも其悲しげなる様子は其側にある淨飯王摩耶夫人を始め、群臣女官に至るまで非常に感動されて譯を知らず何れも落涙失聲したとある、偕、彼は嘆聲を發して「我此の如き聖者の降誕に遇ひながら、不幸にも我年老衰して其傳道の時まで生き延びて親しく其慈に與ることを得ざるは千古の遺憾である」と言ふた、其後阿私陀が死に近きたるとき懇ろに誨へ、「那羅陀よ彼の釋迦種の若き太子は必ず非凡なる聖者なるべし、予か死せる後は、汝必ず家を出て、道を求め、彼に就きて其教を受け、安樂を得べし」と云ふた、後年果して彼が選言が事實となりて那羅陀は佛門に入ることとなつた。

佛の時代に於て榮へし龍 (Naga) なる種族があつた、其種族中の王の一人なる伊羅鉢 (Ilaputra) なる人が大に眞面目になつて道を求めつゝあつた、然るに其友人に夜叉種の王金齊 (Suvannapala) なるものがあつた伊羅鉢尋ねるには、今や佛が出世しつゝあるや否やを以てした、金齊王答へて曰く、我佛の世に出でつゝあるやを知らず、されとかくの如き



ことを聞き居る、彼の曠野の中に一の城がある、此城は本、夜叉種に屬する宮殿であつて阿羅迦樂陀(曠野宮殿)と名く、其城中に古來二句の偈文がある佛陀が此世に出づるにあらずむは人が之を讀むことが出来ぬ、たとひ讀めても其意味が分からぬ、若し佛陀が世に出づるときは讀むことを得べし、されど其意味は佛自身にあらざれば分かれぬと傳ふる、伊羅鉢聞きて強ひて金齊王に之を持ち來ることを求めた、金齊王彼の城に往き、歸り來りて大に喜びて曰く如來は既に出世し賜へり、彼の偈を讀むことを得たりとて示したる謎の如き偈文は左の如くである

慾情の支配の下に主となり、又王たるの人は塵垢を以て蔽はれたるなり、慾情より解脱せよ塵垢より解脱せよ、今やかくの如く慾情につきて説く人は誰ぞ。

痴によりて憂は生じ、智によりて喜は來る、何物の支配を別離して、今や我等は圓滿と安樂とを得らるべき。

偕よく此意味を了解し、此謎を解き、明瞭なる答を與へ賜ふものは佛陀である、此に於て伊羅鉢王切に佛に見えんことを欲し、渴仰に堪へず、澤山の供養物を捧げつゝ、人を遣はして適當の解釋を求められた、色々の婆羅門の學者が解釋を、試みたけれども、満足なる答を得なんだ、遂に當時摩訶陀國に於て名聲噴々たりし那羅陀の所へ此疑問が持ち來たされ

し意に勤劬よ、笑哭語言皆惡を避けよ、詭曲傲慢悉く遠離せよ、他人と共に怨讐を作る勿れ、善言は正念の中に在り。行人常に叫喚の聲を觀すれば、猶猛火熾炎の燃るが如し、婦人を見て容を端正くせよ、須らく捨離して染を生ずること勿れ。曠る時殺す勿れ、相害する勿れ、貪等我慢の事を捨つべし、一切の凡夫身を染著す、毒藥を食ふて平等に死するが如し。聚落に遊ひて忽ちに唾ふ勿れ、他に向て語言讒譖なる勿れ、手に鉢盂を執りて乞食を行へ、才辨ありと雖但黙然せよ。他家是非の事を説く勿れ、他人を毀りて自ら讃嘆する勿れ、語言大高聲なるを得ざれ、猶猛火の遠處に聞ゆるが如し。満足寂定にして常に覺悟せよ、泉の如く池の如く大海の如し、寂定の者も亦復然なり、愚痴の人は半瓶の汗の如く、智慧の者は猶滿池の水の如し。

報 道 一 束

● 満庭露滋くして虫の音たぐいとも憐れにきこえ候  
早や朝夕の肌寒みも感ぜられ候。

● 求道學舎の近角氏は、この度仙台高等學校學生の組織せる佛敎主義の道交會の聘に應じ、一週間の豫定にて去る十五日出發致候、尙宇都宮水戸地方に立寄りて講習院卒業生諸氏の布敎を視察し、旁々講話も試みられ候由。熱心なる氏か講話は如何に東北の敎界に生氣を添え候事と存候。

恰も此時釋尊は正さに成道してベナレス城内鹿野苑に於て初めて法輪を轉じ、耶舍長者を感化し、人皆其光りを仰ぎつゝある時であつた、那羅陀は今や正さに時來れりとして、直ちに此疑問を携へて、佛の所に趨り往きた、彼佛を一瞥するや否や恍惚として十有二年渴仰の念を一時に傾け恰も子なき親が子を得たるが如く、貧しき人が寶を得たる如くであつた、佛は直ちに自在天王造物主の支配を受け、愛情の染著あるを痴者と名づけ、煩惱を解脱して、智慧の大水に没して、一切の方便盡るを智者と名くる旨を諭された、那羅陀心開け、大なる喜を生じて、遍く全身に溢れて、踊躍したとある、彼は直ちに歸りて之を伊羅鉢王に語りたるに彼は大に喜びて「今日始めて佛世に出現し賜ふ、を値ひ難きこと優曇華の如し、多時經歷して乃ち一たび興る清淨なること彼の空中の月の如し、久遠に曠絶して聲を聞かず、清亮なること梵音の響の如し」と言ふたそこで彼は那羅陀に伴はれて佛の所に往き直接に佛の説法を聞き、眼前に佛の尊顔を仰ぎ悲喜相交り、涙下ること雨の如くであつた、此時佛は懇篤に兩人に法を説かれた、今此尊者の傳を終るに臨み、其説法中にある適切なる金言を披萃せずには居られぬ。

老人を供養して他を毀ること勿れ、尊長を見んと欲せば時節を須みよ常に善行及び法語を愛せよ、屢々正眞なる利益ある談を聴け。他に於て常に布施檀を行へ、眞直に詳密に

● 大谷派新法主は此程東北巡化を了り去る十七日無事歸京致され候。

● 哲學館主博士井上圓了氏は來月中旬教育宗教視察の爲め、再び歐米漫遊の途に就かる、由。

● 東本願寺内局顧問渥美契縁師は、目下左の用向を帯びて滞京中に候由。

一、新法主に面會して法主の意を傳ふる事

一、井上伯に面會して懇囑する所ある事

● 本年十一月河内萬國大博覽會を期とし、東洋學會開かるゝに付、列席せん爲め、目下三州蒲郡健碧館にありて論文起草中の由。

● 季侯の遷り變りにや、殺伐なる事共多く有之候大阪の四人斬牛込の實子六人殺し杯は殊の外悲惨の至に候。

● 強姦辯護士あり、墮落せる教育家あり、汽車進行中一婦人を手込にせんとしたる官吏も有之候。なか／＼物騒なる世の中に候。

● 檢事名村伸といふ法官は三年前の舊惡顯はれて、將に懲戒免官に付せられんとするに御座候。時の判事山口淳以後の惡漢といふ噂に候。

● 早稻田大學は去る十九日盛大なる開校式を挙げ候、來賓として侯伊藤の演説も有之候、其要旨は如左に候。

總て教育は偏せざるを尊ぶ、法律、經濟、政治などいふ學問は殊に偏すれば危険の多いものである、國は歴史を有するものであるからソレに重きを置かなければならぬが、同時に學問進歩は世界的進歩なる故ヨソの進歩にも注意して彼の長を採て我が短を補はなければならぬ、學問に國境な



しとは深く注意すべき事である、當校の目的は實用的人物を造るに在りといふ夫れも同感であるが尙ほ段々と西洋のユニバルシテの位地に進めらるゝ事を希望するのである云々

●壯士俳優川上音次郎歸朝して世界的演劇論を唱道致居候、法螺もこれ位なれば罪なくて宜敷候。

●例の京濱佛教徒懇和會は來月中旬頃催さるべく候。今春の如き活劇は御免蒙り度候。

●議會開會も追々切迫致し政黨も色めき來り候。さて政友會の對政府策は如何あるべきか、先日政友會東京支部と關東大會の節尾崎行雄氏は左の演説を試みられ候由。

現内閣の死期眼前に迫れり、力を加へざる亦倒滅すべし、但た往生際の悪しくして息を引取らざるあれば、我黨は武士の情として宜しく之を介錯し遣るべきのみと斷言致され候趣に候へば、政友會對政府の對度は之にて聊か判明致すべきかと存し候。

●其後の日曜講話の出席者并に演題如左候。

佛 國(十二日)  
和言愛語(全)

楠 龍 造  
近 角 常 觀

聖傳講話(十九日)

所 感  
人格の感化

佐々木月樵  
曉 鳥 敏  
和 田 鼎

殘餘は後便に譲り申候。以上。

日 曜 講 話

毎 日 曜 午  
前 九 時 止  
開 會 所

求 道 學 舍

本 郷 川 町 一 番 地

新 刊 紹 介

曉鳥敏著

吾人の宗教

本郷四丁目 文明 堂

曉鳥君は實に筆まめなる人なり、大事小事何事にまれ、目に觸れ、耳に聴き、心に感ずる所、直に發して文章となり、渾然として優に一家をなす。獨り文章に於て然るのみならず、天地間の大事小事亦一こと君が修養上の好資料とならざるはなし。本書題して『吾人の宗教』と云ふ、これ君が心奥に映せし宗教の色彩をば君が靈妙なる筆力によりて一冊の書に縮寫せられたるもの也。君曰く、智者に智者の宗教あり、愚者に愚者の宗教ありと、然らば此書以て愚者の宗教となすべきか、抑々智者の宗教となすべきか、是は讀者の判断に任せん也。(定價貳拾錢)

楠龍造著

佛敎阿彌陀經達意

京 都 東 六 條 法 藏 館

本書もと東京真宗中學に於て講述せしものを多少増補訂正して世に公にしたるものなり。達意的に叙述したるを以て從來の感嘆たる講本さばるかに其損を異にす、附録として維什譯の阿彌陀經、支那譯の稱讚淨土佛攝受經をのせたり、斯學研究者には恰好の良書として讀者にすゝめん(定價三拾五錢)

養病對話

全 上

本書は清澤先生と攝州の藤岡了空翁と一夕相會して肺病に關し多年經驗したる實話を記されたる事實談なり、吾等之を讀みていたく同情の念に堪へざる也、久しく病めるもの若くは病かつゝあるもの宜しく一讀して精神の修養に資せられれば益する所多かるべしと信ず(定價二十錢)

赤松一男著

十二月

全 上

佛敎行事を十二月に就して説明したるものにて故實を知らんとするものには極めて便利なるべし(定價二十錢)また附録あり